

海外食料需給レポート

(2020 年 9 月)

令和 2 年 9 月 30 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2020 年 9 月の主な動き	1
II	2020 年 9 月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報 2 年連続干ばつから脱した豪州の穀物生産・輸出動向	3

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	令和 2 年 3 月以降の食品小売価格の動向	8

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	8
3	コメ	1 2
II	油糧種子	
	大豆	1 7

【利用上の注意】

(概要編)

I 2020 年 9 月の主な動き

写真 米国のデント期を迎えたとうもろこし
(イリノイ州 9月1日撮影)

1 米国のとうもろこし、大豆の収穫開始

米国のコーンベルトでは、8月上旬までとうもろこし、大豆とも順調に生育してきたが、8月中旬以降、アイオワ州等で暴風雨（Derecho）やその後の乾燥により影響を受けた。その後、9月に入り、とうもろこしは成熟期、大豆は落葉期を迎えている。なお、米国農務省「Crop Progress」（2020. 9. 14）によれば、南部の州でとうもろこしの収穫が開始され、主要生産州の収穫進捗率は5%（前年同期3%、過去5年平均5%）。大豆も収穫が開始された。



USDA（米国農務省）の9月の穀物等需給報告では、アイオワ州等の乾燥天候等により、とうもろこし、大豆とも単収が下方修正された。しかしながら、生産量は、とうもろこしが3億7,850万トンと前年度を9.4%上回り、2016/17年度に次ぎ史上2位となり、一方、大豆が1億1,740万トンと、前年度を21.4%上回り史上3位となる見通し。

2 カナダの穀物・油糧種子の収穫開始、小麦増産見通し

9月に入り、小麦等の春作物の収穫が概ね順調に進展している。

カナダ統計局が8月時点の2020年産穀物等の生産量推計を9月14日付けで公表。

小麦や菜種の主産地のカナダ西部（プレーリー）の植生は平年並み又はそれ以上となっている。

この結果、小麦は、前年度より収穫面積、単収とも増加し、春小麦、デュラム小麦とも増産となり、生産量は全体で前年産を5.6%上回る3,410万トン。一方、菜種は、前年産より単収は増加も収穫面積が減少することから、生産量はわずかに減産となり1,940万トン、大豆は、前年産より収穫面積が減少もケベック州等で単収が大幅に増加することから、生産量は前年度を1.5%上回る610万トンとなっている。

3 ブラジルの大豆、とうもろこしの作付面積、生産量とも増加見通し

ブラジル CONAB は8月25日付けで2020/21年度の生産等見通しを公表した。作付けは9月以降の降雨を待って行われるが、穀物（大豆等油糧種子含む）の生産量は、とうもろこしや大豆の収益性がよいことから、2億7,870万トンと前年度より8%増加の見通し。

品目別には、大豆は、好天見通しによる単収の増加期待に加え、中国のASFからの回復による輸入需要の増加や、リアル安から米国産に比べ価格競争力があることから、作付面積が3%増加し、生産量は史上最高の1億3,350万トン（前年度1億2,450万トン）、輸出は8,680万トンの見通し。

一方、とうもろこしは、飼料用需要増により作付面積が7%増加する見通し。生産量は、これから作付けが開始される夏とうもろこしと、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこし（生産量の7割以上を占める）の合計で、史上最高の1億1,290万トン（前年度1億210万トン）の見通し。

Ⅱ 2020 年 9 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8 月下旬、200 ドル/トン前後で推移。豪州、ロシアの生産量の増加見通しから、9 月中旬に 190 ドル/トン台半ばに下落した後、アルゼンチンやフランスの生産減少見通しから、210 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、ドル高により輸出期待が薄れたことから、値を下げ、9 月下旬現在、200 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、8 月下旬、130 ドル/トン台後半で推移。8 月の米国中西部での乾燥、暴風雨による影響懸念、米国産とうもろこしの輸出成約の増加から、価格は上昇し、9 月下旬現在、140 ドル/トン台半ばで推移。

コメは、8 月下旬、540 ドル/トン台前半で推移。乾燥天候による乾季米の供給減に下支えされながらも、パーツ安や新規輸出需要の低迷から、値を下げ、9 月下旬現在、500 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、8 月下旬、350 ドル/トン前後で推移。8 月の米国中西部での乾燥、暴風雨による影響懸念、米国産大豆の中国向け輸出成約の増加から価格は上昇し、9 月下旬現在、370 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 40 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月から 390 万トン上方修正され 27.1 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を上回り 31.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月と比較して、小麦で上方修正も、とうもろこし、コメで下方修正されたことから、穀物全体で下方修正され 27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、とうもろこし、コメで下方修正も、小麦で上方修正されたことから、穀物全体で上方修正され 27.0 億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、4.5 億トンの見込み。

期末在庫量は、8.4 億トンと前月より下方修正され、期末在庫率は前年度を上回る。

(注：数値は 9 月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.1 億トン。消費量は前年度を上回り 6.1 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.5%となる見込み。

(注：数値は 9 月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:2年連続干ばつから脱した豪州の穀物生産・輸出動向

2018年から2019年にかけて、豪州は大規模な干ばつ被害を受け、小麦を始め穀物の生産量は大幅に落ち込んだ。輸出市場を旧ソ連諸国等に奪われ、食糧用小麦をカナダから輸入、コメは輸出国から輸入国となった。

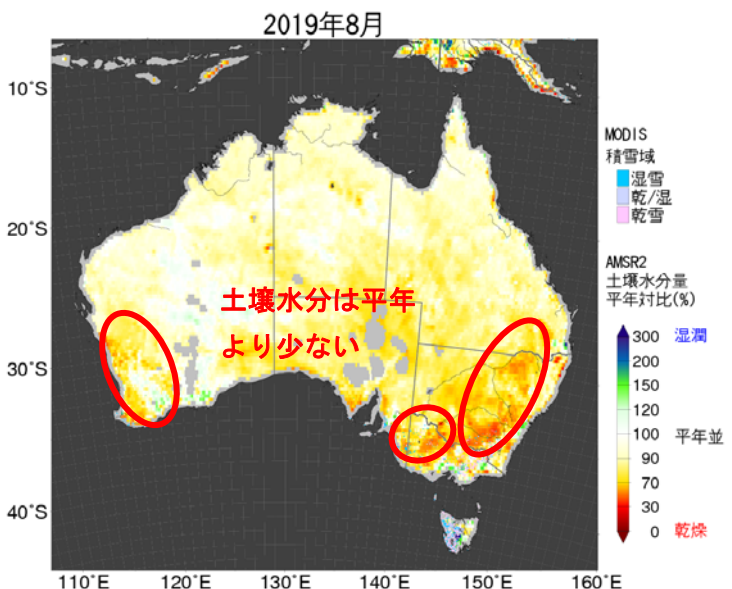
しかし、2020年に入り、小麦等冬作物の作付期の5月から6月にかけて降雨があり、8月以降の成熟期にも引き続いて降雨に恵まれ、このまま行けば平年以上の生産量が確保できると見られている。増産に伴い、中国向け小麦輸出も増加している。最近の豪州の穀物生産・輸出動向についてまとめた。

1 穀物生産動向

(1) 2年連続干ばつとなった2018/19年度、2019/20年度

豪州では、2018/19年度、2019/20年度と2年連続の干ばつとなり、穀物生産は大きく落ち込み、豪州農業資源科学局（ABARES）の「Crop Report」（2020.9.8）によれば、2019/20年度の小麦や菜種などの冬作物の生産量は2007/08年度以来の2,930万トン（うち小麦は1,520万トン）まで落ち込んだ。夏作物に関しても大幅な減産となり、ソルガムについては史上最低の生産量となる30万トン、コメについても灌漑用水の制約から大幅に減産の5.3万トンとなった。

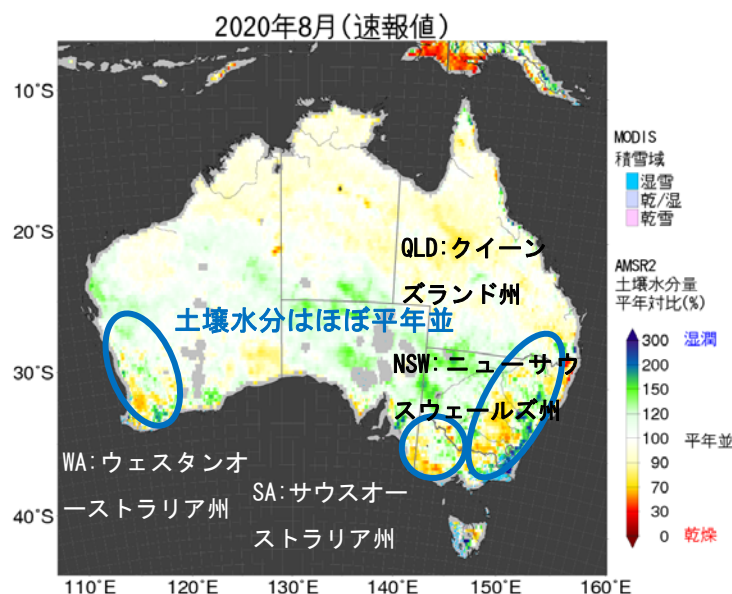
図1 豪州の2019年8月（上）と2020年8月（下）の土壌水分データ（平年対比）。○は穀物主産地



(2) 良好な2020/21年度の生育状況

2020年に入り、5月から6月にかけて豪州東部を中心に冬作物の作付時期に適度な降雨があり、作付けが開始された。8月に入り、豪州西部のWA州でも降雨があったことから、小麦を初めとする冬作物の生育が順調に進展した。中国が豪州産大麦に追加関税を賦課したことから大麦から小麦に作付けがシフトしたこともあり、小麦は増産が見込まれている。

ABARESの「Crop Report」（同上）によれば、2020/21年度の冬作物の生産量は前年度比64%増の4,790



出典：JASMAI プロダクト

万トン（うち小麦は91%増の2,890万トン）と見込まれ、2016/17年度に次ぐ、史上2番目（小麦は3番目）の豊作が期待されている。

10月以降、豪州東部で作付けが開始されるコメやソルガム等の夏作物の作付面積は、2年連続干ばつで大きく減少していたが、降雨による土壌水分改善や灌漑用水の供給の緩和見通し等から作付面積がそれぞれ5倍、4倍に増加することが見込まれている。

写真：降雨に恵まれ順調に開花期を迎えた小麦
（ウェスタンオーストラリア州 8月24日撮影）

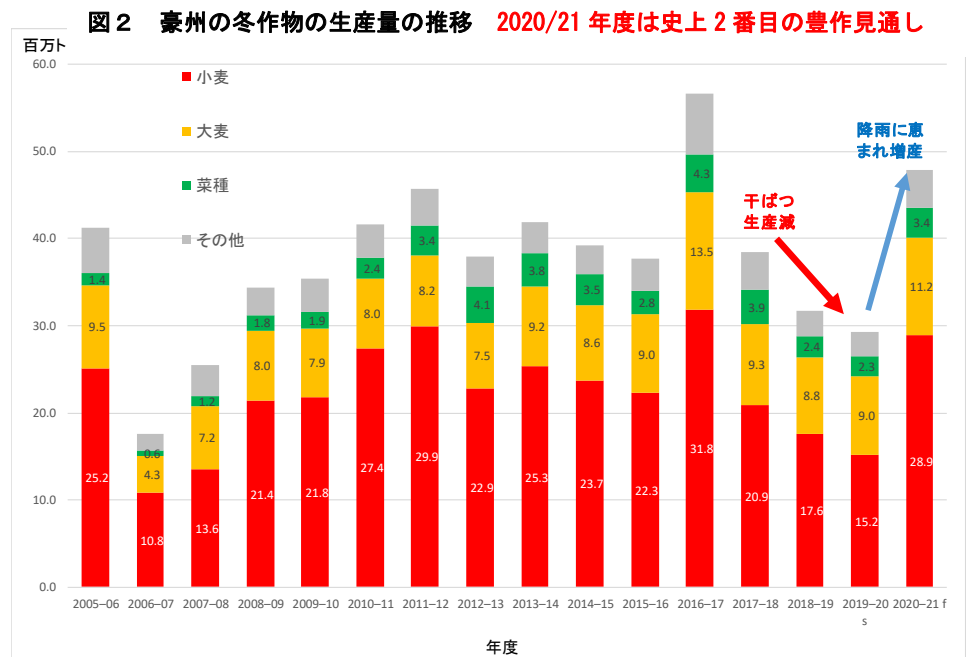


2 穀物貿易動向

（1）2年連続干ばつによる穀物貿易への影響

小麦については、2018/19年度までは、東南アジア諸国の小麦の主要輸入先は輸送距離の近い豪州が中心であった。しかし、2年連続の干ばつによる減産に加え、ロシア、ウクライナの増産に伴う安価な小麦の輸出攻勢から、東南アジアにおける輸出市場を旧ソ連諸国に奪われた。また、食糧用の小麦が不足したこと

から、一時的にカナダから輸入を行った。一方、コメについては中・短粒種の生産国であるが、減産に伴い、輸出国から輸入国に転じ、NSW州のコメの貿易業者のサンライズ社は、仕入れ先の多角化、経営の安定化のために2018年には、ベトナムの精米工場を買収した。



出典：ABARES「Australian Crop report」(2020.9.8)

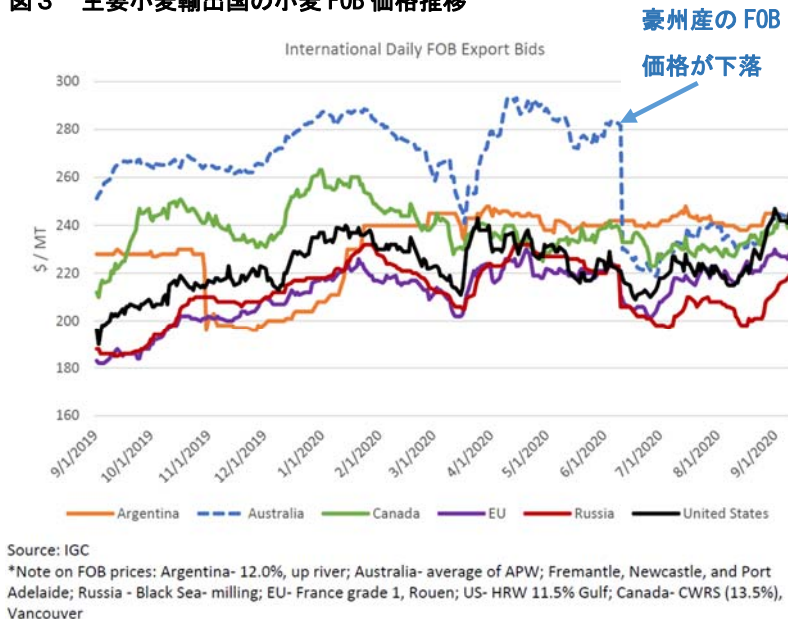
(2) 2020/21 年度の豊作見通しに伴う輸出攻勢

本年に入り、小麦の作付け時期から降雨に恵まれたことから、6月以降、これまで他の輸出国と比べ高止まりしていた豪州の小麦の輸出価格が下落に転じた。一方、新型コロナウイルスの感染拡大等に伴い、本年4月には、競争相手国のロシアが小麦を含む穀物の輸出枠を設定、ウクライナも小麦の輸出上限数量を設定した。この結果、海上運賃で有利な東南アジアや中国向けを中心に豪州の小麦の輸出量は倍増するとみられている。例えば、

中国の海関統計によると豪州からの小麦輸入は、2019年は年間合計で20万トンに満たなかったのが、2020年は1～7月の累計で101万トンとなり、前年同期比では18.8倍となっている。

今後、作付けが行われる夏作物のコメやソルガムについては、生育期の天候にもよるが、一定の輸出の増加が見込まれる。

図3 主要小麦輸出国の小麦 FOB 価格推移

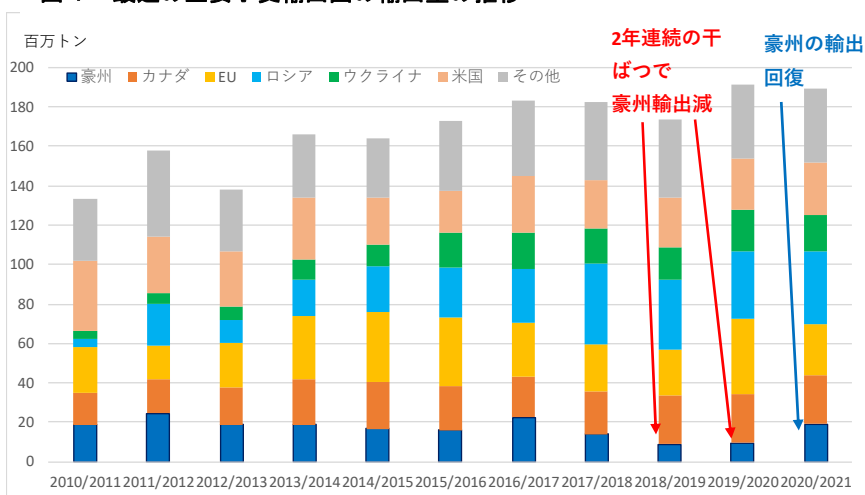


出典：USDA「GRAIN Markets and Trade」(2020.9.11)を農林水産省で加工

3 穀物貿易における豪州の輸出シェアの回復

近年、穀物貿易に占める豪州の輸出シェアについては、旧ソ連諸国の小麦や南米諸国のとうもろこしの輸出増に押され低下していたが、2年連続の干ばつに伴い、さらに国際穀物貿易に占める地位は低下した。しかしながら、本年に入り、豪州の穀物の増産見通しに加え、ウクライナが8月以降、

図4 最近の主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：USDA「PS&D」(2020.9.11)

再度小麦の輸出上限数量を設定したことや、EUの小麦の減産に伴う輸出減少等もあり、豪州の穀物輸出シェアは一定程度回復するとみられている。

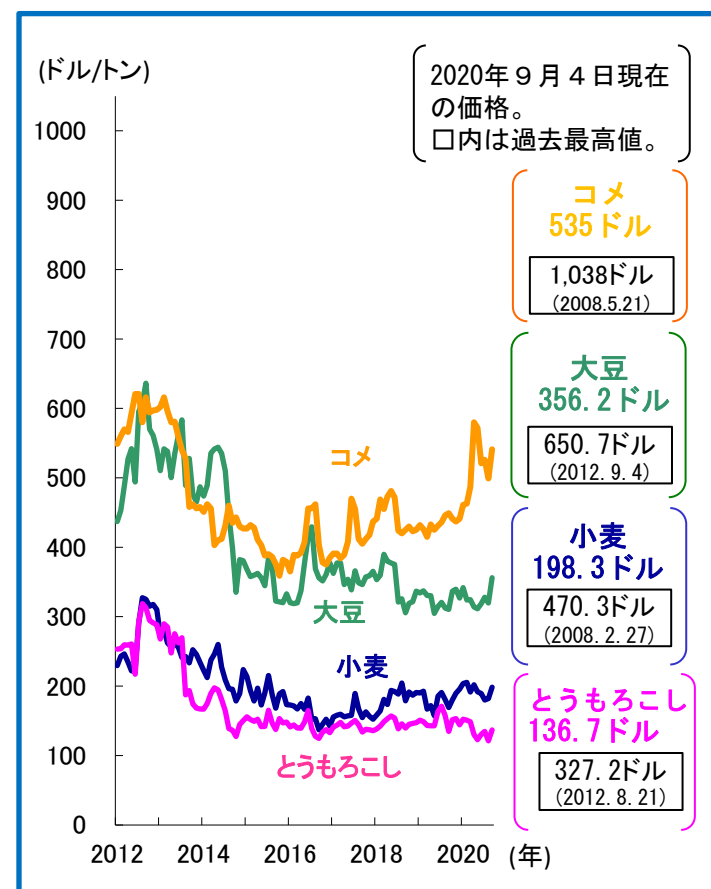
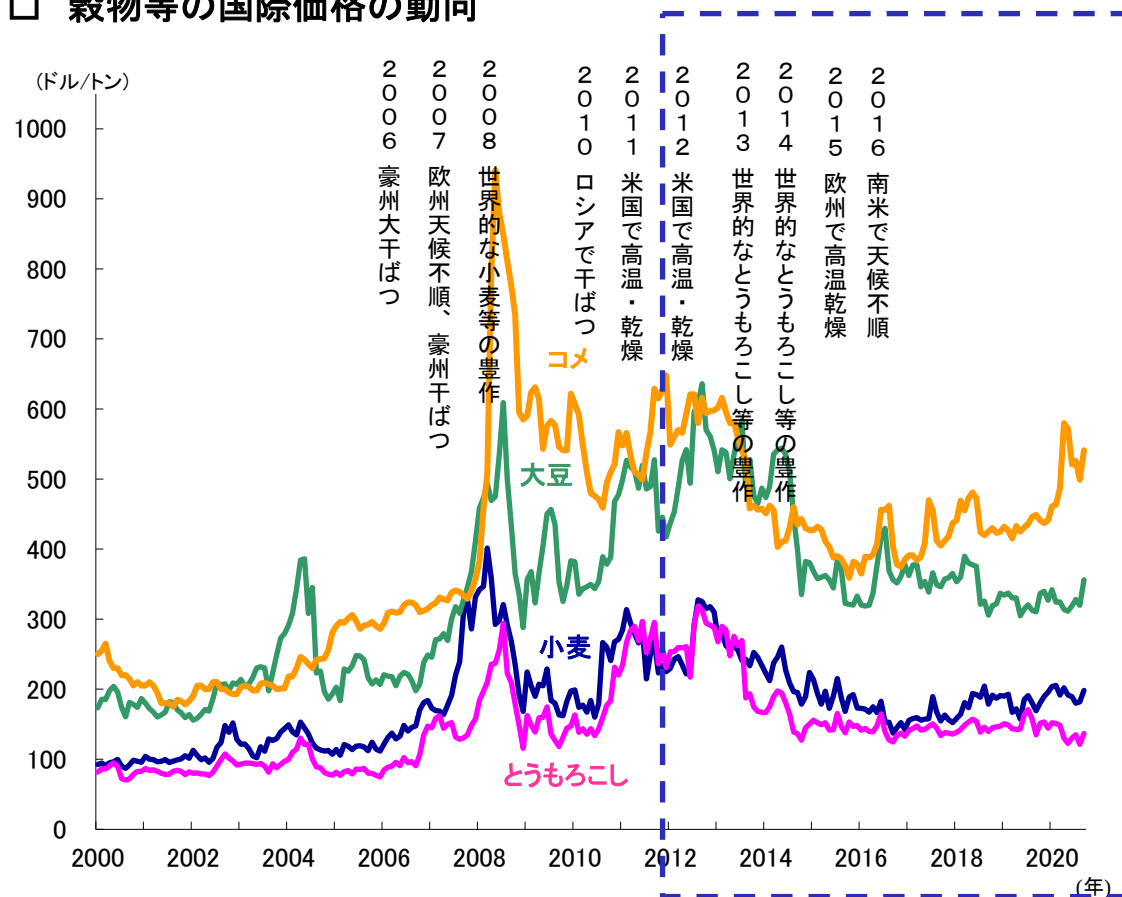
なお、我が国の日本麺向け的小麦を生産しているWA州でも、8月の降雨に恵まれ、平年以上の増産が見込まれている。一方で、輸出価格下落に伴い、中国の豪州産小麦輸入も増加している。

豪州産穀物の生産・貿易状況に注目していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。
2017年以降ほぼ横ばいで推移。コメは、2013年以降タイの在庫放出等から低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇した。4月末のベトナムの輸出枠の解除等で下落したものの、依然として高止まり。
- なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



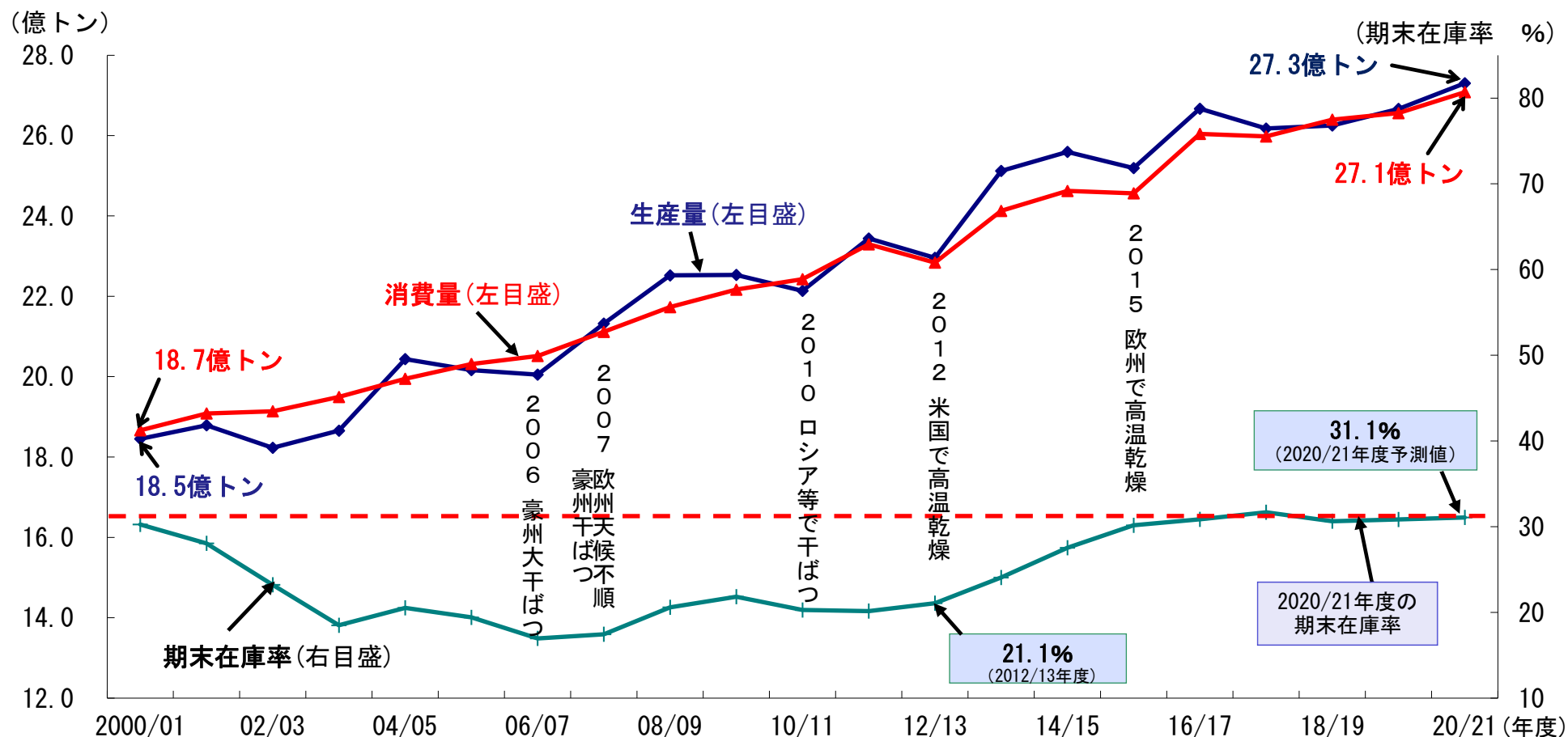
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2020/21年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2020/21年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ることから31.1%となり、直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (September 2020)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和2年3月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和2年3月～令和2年8月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)													
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.7	101.9	101.6	101.6	101.6	101.6	101.3	-0.4%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	101.2	101.6	101.2	101.5	101.2	100.9	-1.3%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	102.4	104.4	105.0	103.7	104.5	104.9	103.3	-1.6%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	101.4	101.5	101.7	101.7	101.6	102.0	0.9%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.8	92.1	92.6	92.9	91.8	92.3	91.5	-0.7%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	102.4	102.5	102.8	102.7	102.8	102.7	1.4%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.9	101.2	102.5	99.9	101.3	101.1	102.4	-1.3%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.2	102.1	102.2	102.1	102.6	102.7	0.2%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.1	93.9	95.2	95.3	94.8	94.1	93.5	-0.7%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和2年4月～令和2年9月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)															
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	102.3	103.2	101.9	101.6	101.0	101.6	0.7%	-0.5%	
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	105.3	108.5	107.9	107.9	107.9	107.2	107.2	0.0%	-1.2%	
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.7	95.5	97.1	95.5	94.3	94.3	93.9	-0.4%	-1.7%	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	100.1	97.4	97.1	97.1	96.2	97.1	95.9	-1.3%	-4.0%	
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.0	110.8	112.9	110.6	110.1	111.0	110.1	-0.8%	-0.8%	
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.7	105.3	100.6	102.7	104.8	104.8	105.8	1.0%	-1.5%	
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	103.4	103.7	103.4	103.2	103.4	103.4	0.0%	0.7%	
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.4	100.4	100.0	99.3	98.3	99.0	97.6	-1.4%	-5.3%	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県での調査を中止し、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県での調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。